

「ニュースレター」の発行にあたって

センター長 笹 賀一郎



北海道大学北方生物圏フィールド科学センターの「ニュースレター(創刊号)」をお届けいたします。

フィールド科学センターは、森林から耕地、そして海洋に至る多様なフィールドにおいて、大規模で継続的な調査研究と実験を総合的に行い、フィールドの持つ機能を詳細に知り、それを活用していくことを目的に、平成13年4月、北海道大学の様々な施設を統合・再編して設立されました。その活動状況につきましては、「フィールド科学センター」のホームページや「北大時報」などで広く紹介されています。しかし、「フィールド科学センター」に所属する、「森林(山・溪流)－耕地(平地・河川)－水域(湖沼・海洋)」にかかわる16現地施設における日常的な活動状況までをお伝えすることは、はなはだ不十分な状況にあります。したがって、各施設でとりくまれている野外学習会や体験学習会などについても、参加者の感想(意見)などもふくめた新鮮な報告はごく一部に限られておりました。なにより、学習会などへの参加呼びかけも、多くは施設の位置する地域だけにとどまり、広くアナウンスするとい

うことではかなり不十分な状態でした。そこで、「フィールド科学センター」のホットなニュースもふくめて、各種行事のお知らせや参加案内などを適切におこなえるようにしたいと「ニュースレター」の発行を計画いたしました。創刊号は、シリーズ化を予定している「エッセイ」のほかに、所属教員の自己紹介を掲載しています。「フィールド科学センター」の多彩な教育研究活動を感じていただければと思います。

「フィールド科学センター」は、環境保全研究に不可欠なフィールド科学を体系化することを目標に、「森林圏－耕地圏－水圏」のなかで生物生産と環境保全に関する教育研究を推進していくことを大きな課題としています。また、教育研究へのフィールドの提供のほかに、長期モニタリングのデータやフィールド情報および各種のサンプルや標本の提供なども課題としています。本「ニュースレター」の第2号からは、ホームページ(<http://www.hokudai.ac.jp/fsc/>)上でお届けすることを計画しています。ホームページには各施設などの詳しい情報やデータベースも掲載していますので、是非ご覧いただくようご案内いたします。

以上のように、本「ニュースレター」を「フィールド科学センター」の活動状況や行事・情報などの紹介の場とすることで、「フィールド科学センター」に関心を持っていただける方々にとっての情報収集の場としていただきたいと思います。また、多くの方々からご意見や要望などをいただく場とすることで、「フィールド科学センター」と皆様方との交流の場になることを願っています。多くのご意見を反映させながら発行を重ねることで、充実した「ニュースレター」を作りあげていく予定ですのでどうぞご期待ください。

北方生物圏フィールド科学センターのフィールドと施設



本センターは、ここに示すように様々な施設およびフィールドにより構成されています。その面積は、国立大学法人全体の面積の約半分を占めています。学内・学外を問わず、研究者、大学院生、学生などの利用が可能です。多くのフィールドでは宿泊施設も完備しており、長期間の研究にも対応でき、様々な環境における生物の観察、栽培・飼育などにも利用可能です。また、あらかじめ希望を寄せていただければ、分析機器の利用に加え、作物、畜産加工物、実験魚などの試材提供も可能です。さらに、フィールド観察や研究の楽しさを伝える様々なイベント、生産物の販売も行っております。これらの内容や利用に関しては、センターのホームページ
(<http://www.hokudai.ac.jp/fsc/>)をご覧ください、直接、各施設の担当者へ御連絡ください。

動植物エッセイ

フィールド科学センターの教員は様々な動植物を扱っています。このコーナーでは教員が研究材料として扱っている動植物について、とっておきのエッセイを掲載します。

【ハスカップと健康と子供たち】

私が研究対象としているハスカップは、アントシアニンやビタミンを多く含み、その機能性に注目が集まっています。最近ではテレビや雑誌で「健康に良い食品」として紹介されることも多くなりました。より多くの人に知ってもらいたい、その魅力を伝えたい、と思う反面、一時のブームや機能性への過剰な反応に不安を感じることもあります。体に良い成分を含んでいても、過分は逆効果にもなります。「健康」への過敏な意識が、このような感覚的な「常識」を鈍感にさせているような気がします。私たちはもう少し「情報」から自由であってもよいのかもしれませんが。食べたいと思ったものを食べる「楽しみ」と、美味しさを味わった時の快楽は健康にも大きく貢献しているはずです。例えば疲れた時には、すぐにエネルギーとなる甘い物が欲しくなるように、人間の欲求は体の維持に根元的に結びついていると思われます。

昨年、全国の小学生がハスカップ畑を訪れる科学教室を催しました。薫風に揺れるハスカップの株に自然と子供たちが集まり、自然に自由に果実を口に運ぶ姿に体験によって実に多くのことを感じ取っていることが分かりました。研究者として正確なデータを蓄積することはもちろん重要なことですが、それを発信し正しく伝える努力が今後ますます求められています。と同時に、こうした情報に加え、体験と時間の共有を提供できるフィールド科学センターの機能が必要とされているように感じています。

(生物生産研究農場: 星野洋一郎)



フィールドエッセイ

フィールド科学センターの教員は様々なフィールドで活動しています。このコーナーでは教員が活動しているフィールドについてとっておきのエッセイを掲載します。



【光る土】

私が勤務している天塩研究林は、1912年(大正元年)東北帝国大学農科大学(北大の前身)トイカンベツ演習林として発足し、約90年の歴史を持っています。研究林は天塩川支流である間寒別川を取り囲むように馬蹄形に広がり、面積は約22,500ha、研究林のほぼ中央を北緯45度線が通っています。年最高気温は35℃、最低気温は氷点下30℃、年較差60℃以上に達する寒暖差の激しい地域であり、12月から4月までは積雪に覆われます。

天塩研究林では、2001年より、国立環境研究所地球環境研究センターと北海道電力総合研究所との共同研究として、森林の炭素循環に関する観測研究を行っています。この共同研究の一環として、研究サイトの土壌炭素含量を明らかにするために、昨秋に土壌を地下60cm程度まで掘り起こし、各深さの土壌の採取を行いました。当日は調査の予定が押してしまい、最後の調査区では既に日

が暮れてしまっていたのですが、湿った表層の土壌を剥くと、剥いだところ一帯が夜空に浮かぶ星のように光り始めたのです。調査していた人全員が感動して、早速この原因が何なのか後日調べました。今のところキノコ的一种で研究林にも生育が認められている「ナラタケ」の菌糸が光ることをつきとめてこれが原因なのだろうと考えていますが、ぜひ来シーズンにはサンプルを採取してはつきりさせたいと思っています。夜の調査はお勧めできるものではありませんが、その綺麗さは一見の価値あります。

(天塩研究林: 高木健太郎)

研究エッセイ

このコーナーではフィールド科学センターの教員が行っている研究のエッセイを掲載します。北海道大学のフィールドで行われている研究を知ってください。

【継続は「科学」なり】

子供の頃、神社や公園でドングリ拾いをしたことがあるだろう。拾ったものを数え上げたかもしれない。ドングリを拾い、数を調べることは難しいことでない。でも、それを毎年同じ季節に同じ木で調べ続けるには大変な努力が必要だ。研究林ではこのように地味な努力を営々と続けている。そして、取るに足りないように見えていた一つ一つの事実が蓄積されることによって科学の基盤となっている。

生態学には長期間調べなければわからない課題が多くある。北方の森林に見られる動植物の周期的な個体数変動や豊凶現象が典型である。最近、雨龍研究林のドングリ(ミズナラ堅果)の豊凶とアカネズミ個体数の変動を分析して面白いことがわかった。野ねずみ個体群は無限に増加することではなく、ねずみ同士の競争によって個体数がある範囲に抑えられていることはすでに知られていた。では、ドングリの豊凶がねずみの個体数に影響するだろうか？豊作の時、ねずみ同士の競争はどうなるだろうか？食物量とねずみの競争の関係はこれまで欧州を中心に分析されてきたが明確な結果が得られていなかった。雨龍研究林の15年間にわたる調査からアカネズミではドングリが豊作の時に競争が緩和されることが、競争はねずみの密度がある閾値以下になると無視できるくらいに弱くなることがわかった。また、このような関係は野ねずみの種類間で大きく違うことも明らかになった。

昨年、各地でツキノワグマやヒグマが頻繁に出没して社会問題となった。ブナやミズナラ堅果の豊凶との関係が指摘されているが分析に耐えられるデータはほとんどない。研究林のような組織的調査が求められている。

(共生生態系保全領域 森林生物保全分野: 齊藤 隆)



北方生物圏フィールド科学センター教員自己紹介

創刊号ですので、フィールド科学センターの教員を所属するステーション毎に紹介いたします。

1) 出身地。2) 研究内容。3) 趣味、モットー。4) 座右の銘。5) 好きな歴史上の人物。6) 最近読んだ本。という内容で書けるところを書いていただきました。個性溢れる素顔を感じていただくとともに、写真から活動の状況を幾分かでも知っていただければと思います。

フィールド科学センターの各施設は、対象とするフィールドにより大別した3つの「ステーション」のいずれかに所属しています。また教員は、各施設に所属すると共に(施設に所属しない教員も若干名います)教育研究部を構成する6つの研究領域のいずれかに所属し、教育研究活動を行っています。

ステーション

森林圏ステーション

耕地圏ステーション

水 圏ステーション

研究領域

生物資源創成領域
共生生態系保全領域
持続的生物生産領域
生物多様性領域
生態系機能領域
生物群集生態領域

センター長



笹賀 一郎: 1) 宮城県。2) 森林の環境保全機能の解明と環境林造性および森林利用法の確立(砂防学・森林水文学・渓流地形学)。3) 読書(??)。6) 「フラム号—北極海横断断記」。
写真: 中国・大興安嶺で(中央が私)

森林圏ステーション長



前川 光司: 1) 兵庫県赤穂市(赤穂浪士の町)。2) 動物(特にサケ科魚類)の生活史戦略、行動生態、保全生態学。3) 囲碁、畑いじり、寝る。4) 特になし。5) 特になし。6) 星野道夫の本(文章が好き)。
写真はアラスカ、ノームにて。持っている魚はオシロコマ。

札幌研究林長



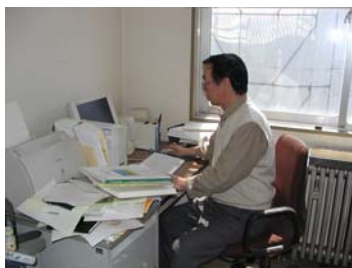
神沼 公三郎: 1) 埼玉県熊谷市。2) 林業経済、林業政策、過疎地域問題。3) 強いていえばスポーツと読書。スポーツは、かつてはサッカーに明け暮れたこともあった。いまはスキー、ジョギング、自転車。読書はノンフィクション(幕末・明治維新もの)、推理小説。4) 競争と効率化が荒れ狂う社会から、働きがいのある世の中への転換に研究面で貢献すること。5) 特になし。6) 毎日、何かしら読んでいるが、とくに印象深いものはない。

南管理部



斉藤 隆: 1) 神奈川県。2) 哺乳類の生態学。動物(特に哺乳類)の個体数と個体群の空間構造に関わる問題を研究のテーマにしています。野ねずみの個体数はなぜ大きく変動するのか? 変動の仕方がなぜ地域差があるのか? このような問題の解明に、生活史の変異や個体間の相互関係を重視して、取り組んでいます。3) クロスカントリースキー、少年野球。4) 気合。5) 坂本龍馬。6) 「博士の愛した数式」

南管理部



秋林 幸男: 1) 北海道。2) 専門は森林政策学と森林資源管理学、今やりたいことは天然林の利用と持続性(当面は樹種毎の直径遷移確率を完成させ、林分の成長予測を)。3) 無趣味(歩くスキーぐらいはやりたい)。4) 立私奉公。5) 新渡戸稲造。6) エドワード・O・ウィルソン著『生命の多様性』

檜山研究林長



夏目 俊二: 1) 愛知県。2) 里山(主に小規模民有林)の再生は、市場経済によって分断された農—林相補関係の今日の創造にあり。道南で泥まみれの実証研究を展開中。3) クラシックギター、サボテンいじり。4) 野駝泥塗棒振。5) ゴッホ。6) 国家の品格(藤原正彦 著)。
写真は、檜山研究林のわさび試験地

苫小牧研究林長



日浦 勉: 1) 富田林市。2) 森林生態系での生物多様性と生態系機能、冷温帯林の地理変異など。3) 映画と写真。4) セバスチャン・サルガドの写真のような、インパクトがありかつ詩的な研究がしたい。5) 特になし。6) 自閉症だったわたしへ(ドナ・ウィリアムズ)。
写真は、林冠アクセスタワーを用いての摘葉実験

苫小牧研究林



村上 正志: 1) 京都府。2) 群集生態学、生物群集がどのようにして出来上がっているのか、多様性や食物網構造のパターンを手がかりに探っています。3) スポーツするのと見るのと、音楽するのと聞くこと。4) がんばる。
写真はパナマの島での調査

苫小牧研究林



揚妻 直樹: 1) 宮城県。2) 研究内容: 自然生態系であっても、人為的影響を受けた生態系であっても、野生動物の生息環境は時間的・空間的に大きく変動します。この環境変動に対する哺乳動物の生態の適応性や、その動物の適応に対する森林生態系の反応を研究しています。
写真は、調査個体の眠そうなシカ

和歌山研究林



野田 真人:1)大阪府。2)樹木年輪幅の広狭変動を対象に、過去の気候を復元する古気候や樹木が生育していた時代の古環境を推定する年輪年代学の解析手法および年輪解析の応用研究。3)半農半漁、たまに木工。4)育林即育人。5)濱口儀兵衛。6)極北の動物誌(ウィリアム・ブルーイット著)新潮社。

北管理部



佐藤 冬樹:1)青森県。2)積雪寒冷地の流域水資源(質・量どちらも)に対する森林の役割解明。3)2)のために森林を実際に操作する野外実験を計画すること。4)やってみなければわからない。5)特になし。6)「森林フィールドサイエンス」(全国大学演習林協議会編、朝倉書店)。写真は森林機能解明のための大規模森林攪乱(皆伐)試験流域。手前は伐採処理前に設置した量水堰。

北管理部



柴田 英昭:1)北海道。2)森林を中心とした生態系の物質循環や水質形成について、人為攪乱や環境変化との関係に注目しながら研究しています。3)旅。4)「ほんとのことなら多くの言葉はいらない」。5)宮沢賢治、星野道夫。6)「森林はモリやハヤシではない」(四手井綱英)。写真は雨龍研究林における厳冬の河川水質調査

北管理部



植村 滋:1)大阪府北部(猪名川上流部の農村地帯)。2)北方林・湿原生態系、更新動態・種子散布・繁殖生態・ザゼンソウ。3)温泉・鉄道・地酒・野草・歴史・野外シンボジウム。4)自然体。5)坂本竜馬。写真はパートナーのザゼンソウ。ユーモラスな形の花は、発熱という寒冷地に適応したユニークな技をもつ。種子の多くはネズミに食べられるが、彼らを利用して適地に種子を分散させるしたたかな植物。

北管理部



車 柱榮:1)韓国 江原道。2)菌類分類・生態学、造林学。3)森林に樹木の天然更新および森林火災や火山などの攪乱後の森林再生過程における種子の発芽、稚樹の生存、成木の枯死と倒木の腐朽および分解などに菌類な働きは様々である。また、樹木を含んだ林相植物の根圏は菌根菌などによるネットワークに結ばれ、種多様性の維持にも欠かせない存在である。このような森林生態系における生物間の相互作用について菌類の立場から探索する事である。写真はスノーパンクに生えるキノコ

天塩研究林長



野村 睦:1)武州多摩。2)森林水文、北国だから積雪寒冷地の水循環も興味の焦点。3)歩くこと。4)研究も遊びも「人の行く裏に道あり花の山」かな。5)きつと市井の人の中にいると思う。6)「算法少女」遠藤寛子(ちくま学芸文庫)。

天塩研究林



高木 健太郎:1)福岡生まれ、札幌育ち。2)森林生態系の物質循環(炭素と水がメイン)。3)山スキー、釣り。4)「果報は寝て待て」「人のふり見て我がふり直せ」。5)桑田佳祐6)「石の扉」。写真「冬の気象調査」

中川研究林長



門松 昌彦:1)生まれは鹿児島県、育ちは千葉県です。2)ミズナラなどの樹木を対象として、その遺伝的変異を主に研究しています。3)気晴らしとして、飛行機の写真を撮ったり、関連する本を読んだりします。5)尊敬する歴史上の人物は、やはり西郷隆盛さんです。写真は、公開講座「おいしいねっご自然塾」の一コマです。

雨龍研究林長



吉田 俊也:1)神奈川県。2)生態系の保全を考慮した森林施業、伐採や植林の生態学的側面からの評価や、試験的な施業の効果を調べています。3)旅行。4)Balancing Values。5)伊能忠敬。6)三戸祐子『定刻発車』。

耕地圏ステーション長(流動教員)



近藤 誠司:1)出生は京都、小中学校は愛知県三河地方、高校は名古屋市内。2)草食動物の生産システムに関する研究。ウシ、ウマ、シカなどを研究対象としている。本来の研究バックグラウンドは家畜行動学。3)時々、カメラで川を下る。時々、流籠馬競技に射手として出場する。時々、シカ猟をする。4)元気を出せば何でも出来る。毀誉褒貶さあればあれ、誠をもってこれ貫くのみ(!?)。5)特になし。6)「硫黄島の星条旗」、「脳は空より広いか」。

生物生産研究農場長



荒木 肇:1)北海道夕張郡栗山町。2)農耕地・作物。これまではカバークロップを導入した環境保全型生産システムを調査研究し、今後は耕起や施肥方法もあわせて長期に生産性を維持できる農耕地形成を調査。3)テニス・野球・推理小説。4)思った時がはじまり。2つの道があるなら苦難の道を歩むべし。5)坂本竜馬。6)豊かな石油時代が終わる。

生物生産研究農場



山田 敏彦:1)岐阜県。2)草類資源作物の遺伝育種学。ススキなどの草類バイオマスを利用したバイオマスリファイナリーシステムの実現を夢見ています。3)山歩き、スキー(現在、時間なし)。4)成せば成る、成さねばならぬ何事も、成らぬは人の成さぬなりけり。5)武田信玄。6)百年の食(小学館、渡部忠世)。写真は、ススキ属遺伝資源の収集風景

生物生産研究農場



鈴木 啓太:1) 埼玉県。2) 家畜を対照とした生産システム(繁殖管理、生産管理等)に係わる研究を展開しています。家畜生産システムの改善に少しでも貢献できればと考えております。3) 無趣味かつ無茶大食です。強いて言えば、散歩、映画鑑賞、乱読、近年銃(射撃)もやっています。4) 塞翁が馬。5) たくさんいるので…。6) たくさんあるので…。

生物生産研究農場



平田 聡之:1) 富山県。2) アカローバの個体群動態についての個体ベースの解析、栽培管理と圃場内の空間変異の関係についての解析。3) 週末旅行。4) 為せば成る。5) W. P. プルックス。6) 佐藤 多佳子著「しゃべれどもしゃべれども」北方謙三著「楊家将」。
写真: トウモロコシ畑にて

生物生産研究農場



星野 洋一郎:1) 群馬県沼田市。2) 植物バイオテクノロジーによる園芸作物(アルストロメリア、ハスカップ、ペリヤ類)の育種に関する研究。3) 山歩き。6) 村上春樹訳「グレート・ギャツビー」、近藤統一、塩野七生、浦沢直樹。
写真は、ハスカップ畑での子どもの科学教室

生物生産研究農場



高橋 誠:1) 函館生まれ静岡育ち。2) 土地を基盤とした家畜生産システム、特に乳牛の放牧の研究を行っています。3) 釣り(何でも)、カメの飼育(現在17匹)。4) 真剣至誠。5) 特になし。6) あかんべえ(宮部みゆき)。
写真は北大農場における乳牛放牧試験の風景。

流動教員



長谷川 周一:1) 東京都。2) 植物根の水吸収、農地の排水、土壌中のガス拡散、過剰養分の溶脱など水と物質の動態を生産と環境面から研究してきた。土を「丸ごとどうやって測るか」を考えているときが楽しい。3) 特になし。4) あまり考えたことがない。5) 特になし。6) 若い世代が気がかりで、「格差社会」「労働ダンピング」を読んで考えた。
写真は、冬期間の土壌計測器の動作確認作業

植物園長(流動教員)



増田 清:1) 千葉市。2) ニンジン培養細胞、アスパラガスなど。雌雄植物における花器官の退化、核膜の機能と形態形成。3) 木工、ローストビーフづくり。4) 疑問に思ったら必ず自分で確かめてみる。5) 特になし。6) 金印偽造事件。
写真は開園をひかえた植物園で(仕事をしているところではない)。

植物園



富士田 裕子:1) 宮城県仙台市。2) 植物生態学 研究内容・対象: 湿地林や湿原の植物群落や植物と立地環境の相互関係の解析。ミズバショウの個体群動態。北海道内各地のフロア調査。4) 研究をわくわくしながらやること、面白くないと長続きしませんから。
写真: サロベツ湿原にて(冬もこんな格好で調査に出かけます)

植物園



加藤 克:1) 愛知県。2) 札幌農学校から続く博物館の標本の歴史を明らかにすることで、標本をより魅力ある研究資源として活用できるようにしています。対象は、博物館標本すべてで、その周辺情報である古文書や過去のスタッフの書簡や写真類も含まれます。3) 読書・写真。4) 死ぬほどやっても死にはしない。
写真: 研究対象である博物館の外観

植物園



東 隆行:1) 北海道。2) ヤナギ科、スミレ科植物。植物からDNAを採取して、その違いをもとに系統関係を推定し、形質の進化や分類を見直す。3) 旅行、ドライブ。4) あいさつを欠かさず、いつも笑顔で。5) 源義仲。6) のび太・ジャイアン症候群。
写真は「沖縄本島嘉津宇宇にて植物観察のおりに」

静内研究牧場



秦 寛:1) 東京。2) 牛・馬、家畜生産と生態系。3) 釣、乗馬、焚き火。3) とくになし。4) とくになし。5) 希望のニート。
写真: マイパートナー「波樹」と

水圏ステーション長(流動教員)



後藤 晃:1) 大阪府。2) 北海道、ロシア、アラスカなどの北方域の川や湖に生息している淡水魚類を対象に、その生物多様性の成り立ち、種多様性の創出機構、生物間相互作用、および希少種の保全に取り組んでいる。3) 畑いじり、スポーツ鑑賞。4) 志半ばにして、なお道遠し。5) 南方 熊楠。6) パンダの死体はよみがえる(遠藤秀紀)

厚岸臨海実験所長



佐野 清:1) 東海地方。2) ヒトデやウニで、卵の減数分裂を制御する卵内機構や、卵と精子の融合時に必要な外液中のCa²⁺イオンの役割について研究。3) 読書、家族旅行(趣味というより願望)。6) ごまかし勉強ーほんもの学力を求めてー。できるだけ塾に通わずに受験に勝つ方法。写真は、一般教育演習(集中)受講生と大黒島にて。向かって右端が本人。

七飯淡水実験所長



山羽 悦郎:1) 東京都。2) 魚の卵。魚類卵の受精卵のなかにプログラムされている形態形成のプログラムを明らかにすること。3) 映画鑑賞、読書、水泳。4) 人生、なるようにしかならない。5) L.v.Beethoven。6) 回転寿司「劇安ネタ」のカラクリ。
写真: 七飯淡水実験所のアルビノイトウの稚魚

室蘭臨海実験所長



本村 泰三:1) 兵庫県。2) 藻類の細胞生物学、特に核分裂サイクルとオルガネラ分裂サイクルの制御機構など。3) 読書、白黒写真。4) 我々はみんな年をとる。それは雨ふりと同じようにはっきりしたことなのだ(村上春樹「世界の終わりとハードボイルドワンダーランド」から)。5) 無し。6) 慧星の住人(島田雅彦) 写真: 電顕観察中の私

室蘭臨海実験所



長里 千香子:1) 岩手県。2) 大型海産藻類、褐藻植物の生殖、発生に関して細胞生物学的見地から研究を行なっている。3) 無し。4) 為せば成る
写真は、研究所の前浜で実験に使う海藻を採集しているところ。

室蘭臨海実験所



四ツ倉 典滋:1) 愛知県。2) 大型藻類、特にコンブ類の多様性研究・保全生物学研究・育種研究。3) ドライブ。4) Be ambitious!。5) 宮部金吾。6) 国家の品格(藤原正彦)
写真は、知床ペキンノ鼻“コンブ調査”。

洞爺湖臨湖実験所長



上田 宏:1) 北海道・札幌市(20年間国内外を回遊し回帰しました)。2) サケが生まれた川(母川)に繁殖のため回帰する母川回帰機構を、動物行動学・生殖生理学・神経生理学的に解析しています。3) 旅行・体操。4) 心身健全、奮闘努力。5) 上杉謙信、レオナルド・ダ・ビンチ。6) 微光のなかの宇宙(司馬遼太郎)

洞爺湖臨湖実験所



傳法 隆:1) 青森県。2) 接合藻類ミカヅキモの種分化の研究、北海道の湖沼、湿原等の微細藻類の系統保存、及び洞爺湖湖沼の環境モニタリングを行っている。3) 映画鑑賞。5) 坂本竜馬。6) 悪夢のサイクル(内橋克人)。

臼尻水産実験所長



宗原弘幸:1) 北海道。2) 北方性海産魚類の生活史と繁殖生態、また人為的な環境変化に対する生物の応答、海流の年変動に対する稚魚群集の変化など。3) スポーツ観戦など。4) 刹那の満足とリスクに対して、長生きして出会う利得のバランスシートの計算。5) 大黒屋光太夫。6) 赤いカナリアの探究。

生態系変動解析分野(函館キャンパス)



宮下 和士:1) 岡山県倉敷市。2) 海洋生物資源の定量的可視化に関する研究、海洋生態系保全および産業の持続性に関する研究、など。3) 釣りなどアウトドア一般、スポーツ(最近は評論だけ!?)。4) 石橋をたたいて割れる前に渡りきる。5) 最近では新渡戸稲造。6) バムとクロ(子供の絵本)

生態系変動解析分野(函館キャンパス)



岩森 利弘:1) 青森県。2) 漁船係留障害に関する基礎的研究。3) 魚釣り(海釣り)。4) 忍耐。5) 函館港の地形、深浅測量に着手した広井勇。6) 森が消えれば海も死ぬー陸と海を結ぶ生態学ー(松永勝彦)

生態系変動解析分野(函館キャンパス)



山本 潤:1) 北海道。2) スルメイカ・スケトウダラの再生産機構に関連した資源変動の解明。水中カメラロボットを使った海中観察(知床周辺海域)。3) 野球観戦、スノーボード。4) Life is good! 5) 新渡戸稲造。6) 沈まぬ太陽(山崎豊子)

編集後記

日本の理科教育が弱くなっているという報道を多く見かけるようになっていきます。若い世代の自然科学への興味が薄らいでいるとは思えません。実際に見たこともない生物を、文章や写真からだけで学習しているからではないでしょうか。現代社会では、問題の原点を見ること無く情報だけが錯綜しています。自然現象の現場に居合わせることも少なくなっています。当センターでは、生物が生活する様々なフィールドをもち、大学での教育・研究を行なうとともに、一般の方々も参加できる活動も行なっています。本センターの様々なイベントに参加して自然現象を体験して見ませんか? (e.y.)

平成19年度に開催するイベントなどのお知らせ (平成19年5月1日現在)

※各施設等で開催予定のイベントなどの内、日程などがある程度決まっているものだけを掲載いたします。

- 公開講座 個体誕生のドラマを見てみよう(厚岸臨海実験所)
日時:平成19年7月29日 10:00~16:00(予定)
募集期間:7月2日~7月16日(予定) 対象:小学校5年生から高校生 20人
- 公開講座 自然が教科書塾「森から学ぶ理科」(和歌山研究林)
日時:平成19年8月(詳細日程未定)9:00~16:00
募集期間:7月1日~7月25日 対象:小学高学年50人
- 親子のためのスノーケリング教室2007(臼尻水産実験所)
日程:平成19年8月5日 対象:親子20人
- 中学・高校生のための臨海実習(臼尻水産実験所)
日程:平成19年8月11~12日 対象:中学・高校生20人
- 小中学生のためのウニの観察会(臼尻水産実験所)
日程:平成19年9月8~9日 対象:小中学生20人
- 小中学生のためのサケ・マス教室(函館キャンパス・七飯淡水実験所)
日程:平成19年10月20日 対象:小中学生25人
- 北海道中央バスのバスツアーコース(クラーコース)の見学先に植物園が入ることになりました。毎週水曜日です。 <http://www.welcome.city.sapporo.jp/sightseeingtourbus/index.html>